講　演

価値創造× SDGs「創価教育と世界市民教育」

SDGs における世界市民教育の重要性
ポスト・コロナ世界で“Oneness”を実現するために

大阪大学 教授／前国連大使　星　野　俊　也

今回は、創価大学が開催されてきた「価値創造× SDGs」のシリアルイベントの３年目であり、また本年は創価大学の創立50周年にもあたるということで、その記念すべき年のイベントに招いていただき、たいへん光栄に思います。

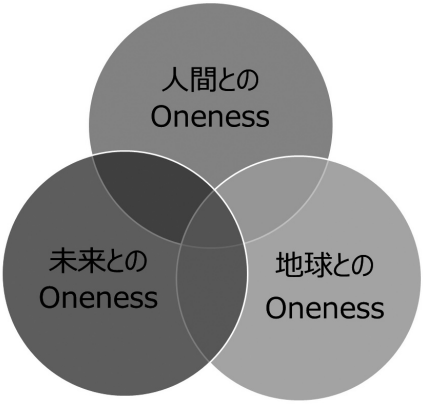
今回のテーマは SDGs の4番目の教育です。創価大学は世界市民教育においても長い実績を積まれています。私も大学で教育に携わっていますが、教育と SDGs を結び付けるとどのようになるのかというお話をすることは知的なチャレンジです。「SDGs における世界市民教育の重要性」というテーマをいただき、「ポスト・コロナ世界で“Oneness”を実現するために」というサブタイトルが思い浮かびました。今回はこのような観点から話します。

先ほど馬場学長からもお話がありましたが、創価大学はスーパーグローバル大学創生支援事業にも採択されていて、“Get Global, Be Bold”という掛け声の下に世界市民教育に取り組まれてきたということです。また、人間教育の世界的な拠点の構築、すなわち平和と持続可能な繁栄を先導する世界市民教育プログラムを進められています。

そして、いかなる意味で世界市民教育を考えているかを見せていただいたところ、この世界には様々なバックグラウンドを持つ多様な人々がいるわけですが、そのような人々の中で合意形成を図り、問題解決へのムーブメントを起こ

し、それをクリエーティブに実践していくことを目指されているということがよくわかりました。そして、21世紀の世界に生きる私たちに必要な資質や価値観、取り組みは、世界市民教育を通じて育む必要があると実感しました。

図1　3つの“Oneness”の統合



出典：著者作成

私は、SDGsと世界市民教育において“Oneness”、一つであることを強調しました。この“Oneness”には三つあります。一つ目は人間との“Oneness”、私と世界のさまざまな人々との間の“Oneness”です。二つ目は地球との“Oneness”で、地球の生態系とその中の自分が一体で一つであるということです。三つ目は未来の時代と今を生きる自分との間での“Oneness”です。「世界市民という私」を考えたときに、この三つの“Oneness”の中の中心に自分を位置付けることができる存在になれるかということ、そして一人一人の「私」が、人間、地球、未来とつながっていくような教育をしていく、あるいは学習をしていくことにより、世界が変わっていくのではないかということです。私は馬場学長から提示された世界市民教育の話を聞いたときに、このようなイメージが湧いてきました。

また、SDGsが世界市民教育にとって最高の教材になると直感しました。SDGsは17の大きな目標から成る、持続可能な開発目標ということです。17のゴールは5つに分かれています。これを5つのPと呼びますが、Peopleに関

するゴールが1番から6番まで、Prosperity ＝豊かさに関するゴールが7番から11番まで、Planet つまり地球を丸ごと見ていくゴールが12番から15番まで、Peace ＝平和に関わるものが16番、そして全てのゴールをパートナーシップに基づいて、皆で一緒に実現していく Partnership が最後の17番です。

これを、先ほどの私の三つの“Oneness”に合わせていくと、人々との間では1番から6番までの People（人間）のゴールが関わり、地球との“Oneness”を考えるときには12番から15番までの Planet（地球）のゴールに関わり、未来においては、Peace（平和）と Prosperity（豊かさ）に関連したゴールがあります。人々が手と手をつないで実現するというパートナーシップは全体をカバーするものですのでこのような構造になっていると理解していいと思います。

世界市民教育と SDGs を考えたときに、まず SDGs についての理解をもう少し深めておいたほうがよいと思いますので、私が SDGs の特徴だと思うものを三つ紹介します。

1 つは、SDGs が目標ベースのものであるということです。「このような世

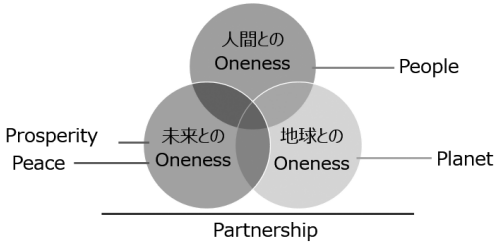
図2　5 つの P と SDGs

出典：国連広報センター

図2　5つのPとSDGs

People（人間）－あらゆる形態と次元の貧困と飢餓に終止符を打つとともに、すべての人間が尊厳を持ち、平等に、かつ健全な環境の下でその潜在能力を発揮できるようにする	
目標1	あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる
目標2	飢餓を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する
目標3	あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
目標4	すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し生涯学習の機会を促進する
目標5	ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女児の能力強化を行う
目標6	すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する
Prosperity（豊かさ）－すべての人間が豊かで充実した生活を送れるようにするとともに、自然と調和した経済、社会および技術の進展を確保する	
目標7	すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する
目標8	包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する
目標9	強靭（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る
目標10	各国内および各国間の不平等を是正する
目標11	包摂的で安全かつ強靭（レジリエント）で持続可能な都市および人間居住を実現する
Planet（地球）－持続可能な消費と生産、天然資源の持続可能な管理、気候変動への緊急な対応などを通じ、地球を劣化から守ることにより、現在と将来の世代のニーズを充足できるようにする	
目標12	持続可能な生産消費形態を確保する
目標13	気候変動及びその影響を軽減するためにの緊急対策を講じる
目標14	持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する
目標15	陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、並びに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する
Peace（平和）－恐怖と暴力のない平和で公正かつ包摂的な社会を育てる。平和なくして持続可能な開発は達成できず、持続可能な開発なくして平和は実現しないため	
目標16	持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する
Partnership（パートナーシップ）－グローバルな連帯の精神に基づき、最貧層と最弱者層のニーズを特に重視しながら、すべての国、すべてのステークホルダー、すべての人々の参加により、持続可能な開発に向けたグローバル・パートナーシップをさらに活性化し、このアジェンダの実施に必要な手段を動員する	
目標17	持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

図3 「世界市民教育」と SDGs —3 つの“Oneness”の統合



出典：著者作成

界を達成する」という目標があり、そこからバックキャストをし、今の私たちが取るべき行動を考える、あるいは実践するという方法論を提供しているということです。まずは目標ありきということが特徴のひとつです。

2点目は、中核的な理念として“leave no one behind”（誰一人、取り残さない）という考え方が提示されていることです。この考え方は、長年にわたり、日本政府の政策としても、国連の中での政策としても重要視してきている人間の安全保障（Human Security）というものとも非常に密接な関係にある理念だと考えます。

3点目の特徴は「トランスフォーメーション：変革」ということです。今の時代、例えば、今日のセミナーもオンラインでしなければいけないのは、我々が新型コロナウイルス感染症のパンデミックという状況にあるからです。このように大きな変化の中にある時代のなかで新しい世の中をつくるのであれば、より良いもの、より高次のものをつくっていく必要があるわけですが、そのためには、次のあるべき世界に向かっての変革を考えることが不可欠です。そのような新しい時代を創造するための変革を促進するものとして SDGs は使えると思います。

SDGs 達成へ向けて変革のための行動が必要だということを申し上げましたが、その前提として、より適切な方向に私たちを導く教育が必要です。そこに世界市民教育という柱があることで、より良い変革の行動への視界が開けゆくものと期待しています。

教育における持続可能な開発に関しては、2002年に日本政府が世界に向け

て発信した「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development（ESD)）という取り組みがあります。主に環境、経済、社会のあるべき方向性について、教育の現場でも考えていこうということです。一つ一つについては述べませんが、環境、エネルギー、文化の多様性、平和、人権、ジェンダー、福祉、あるいは防災、気候変動など、さまざまなテーマに関して、既に、教育の現場でこのようなことを議論することが重要だといってきた経緯があります。また ESD では、課題解決型の教育が必要だということも提示されてきました。

SDGs の中には17 の目標があり、その4番目が今年のシリアルイベントのテーマでもある教育ですが、その教育は全ての SDGs の基本だと言うことが可能だと思います。したがって、ESD 教育の中で協調されてきた6 つのポイント、多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任制は、SDGs を教育に持ち込むときには極めて重要で基本的なアプローチとなると思います。

Education for Sustainable Development と Sustainable Development Goals を並べて見ると共通しているのは、Sustainable Development（持続可能な開発）という部分になります。持続可能な開発という言葉の意味は何かというと、将来の世代の人たちの経済発展の基盤を損なうことなく、現在に生きている私たちの世代のニーズを満たすものということです。逆に言えば、現在、私たちが好き勝手な暮らしをすると、未来の世界の経済発展の基盤を損なうことがあるので、未来のことも考え、今を生きるということです。私が未来との“Oneness”を強調した理由はここにもあるわけです。

Education for Sustainable Development は手段としての教育ということで、その手段は何を目標にしているかというと持続可能な開発がそこにあるわけです。やはり目標を達成する上で教育が手段としても極めて重要だということが示されているのだと思います。

国連はなぜ今の時期に SDGs を合意する必要があったのかというと、世界は、地球は、あるいは人類はもはや持続可能ではない状況に近づいているという厳しい現実があるからだと思います。我々人間からすれば地球はたいへんに大きな天体ですが、そこには限界というものがあり、その限界点を超えると取

り返しのつかないぐらいの壊滅的な変化が起きてしまいます。このような地球の限界が「プラネタリー・バウンダリー」といわれるものです。

私たちも気候変動の影響は日常的に実感するようになってきていると思いますが、生物多様性やその他の分野でもこのままいくと地球が壊滅的なダメージを受ける状況になっています。皆さまはこのような危機感を覚えたことがありますでしょうか。普段の生活の中で地球全体を見ることはなかなかありませんが、だからこそ地球との“Oneness”を考えていただきたいです。このまま私たちが今までの行動を続けていくと、プラネタリーバウンダリーをかなり超えてしまうことになります。地球自体が自分をサステイン（持続）していくことができなくなるということです。

ただ、まだ間に合います。そして、そのためには2030年までに我々がどのように行動するかという、ぎりぎりのところにあります。この危機感や、ぎりぎりの状況にあるということを実感すると、今、SDGs を考える、世界市民教育を通じて視野を広げていく必要があることが実感できると思います。

SDGs を採択した国連決議の中には、「我々は、貧困を終わらせることに成功する最初の世代になり得る。同様に、地球を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない」という一節があります。貧困削減について、我々はこれまでに大きな努力をしてきました。世界の人々の格差をなくしていくというのは決して生易しいことではなく、大変な努力が必要ですが、我々の努力次第では貧困を終わらせることが可能になる最初の世代になるかもしれないといっています。

しかし、地球を救うことに関しては、最後の世代になるかもしれないともいっています。我々が失敗すれば後はないということです。手遅れにならないために、SDGs に基づく目標を達成するためには、世界市民教育が必要だと実感することがとても重要な出発点になると思います。

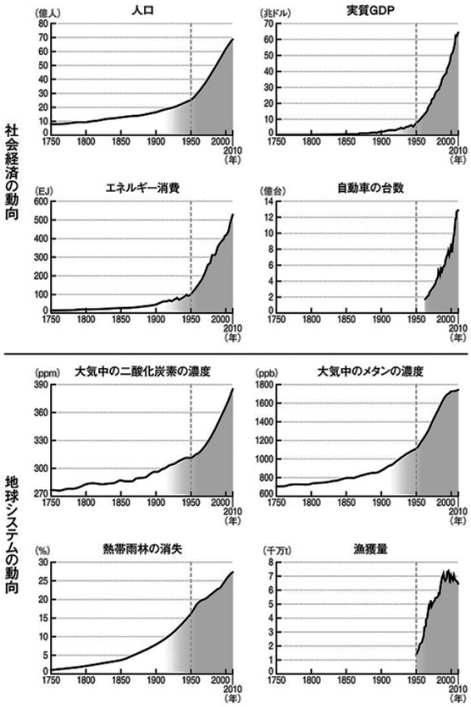
最近、「アントロポセン（Anthropocene）」という考え方が知られるようになってきました。「人新世」と書いて「ひとしんせい」あるいは「じんしんせい」と訳されているものです。46億年前に地球という惑星ができ、様々な地質年代を経て現代に至っています。その間には恐竜の時代もあり、そこに哺乳

類が出てきて、人類が出てきて、そしてホモサピエンスと呼ばれる知的な人間が出てきました。ホモサピエンスが出てきたのは、長い地球の歴史の中では恐らく20万年前ぐらいのレベルだとされています。このような長い地球の歴史で人類の経済活動が地球環境や生態系に決定的な変化を起こす時代が来ているのではないかということです。

46億年の地球の歴史あるいは20万年のホモサピエンスの歴史の中で、1945年以降、そして、2000年以降がどれだけ大きな影響をもたらしているか。図4のグラフは大加速時代における人間活動と地球システムというもので、人口がどのようになってきたか、あるいはGDPがどのようになっているか、エネルギー消費、大気中の二酸化炭素の状況、大気中のメタンの濃度はどのようになっているかということを見ています。

出発点は1700年代の終わりで、つまり産業革命以降ということです。人間の

図4　大加速時代における人間活動と地球システム

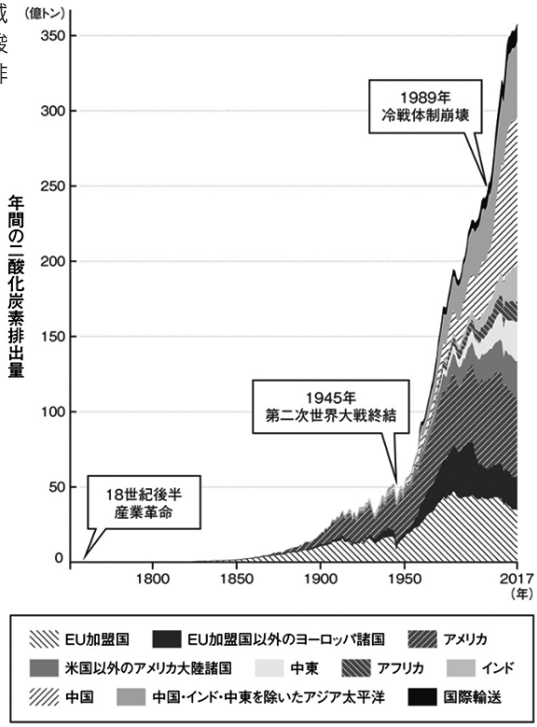


Will Steffen et al., "The trajectory of the Anthropocene: The Great Acceleration," *The Anthropocene Review*, 2, no.1 (2015) をもとに作成

出典：斎藤幸平『「人新世」の資本論』（集英社新書、2020年）より

活動によって、先ほど述べた指標は右肩上がりにどんどん上がっていきますが、1945年以降、特に20世紀の終わりから現在にかけて急速に上昇している線が見られます。これらが全て、地球に対して負荷を与えていることになります。

図5　地域別・二酸化炭素排出量



Carbon Dioxide Information Analysis Center (CDIAC) および Global Carbon Project (GCP) のデータをもとに作成

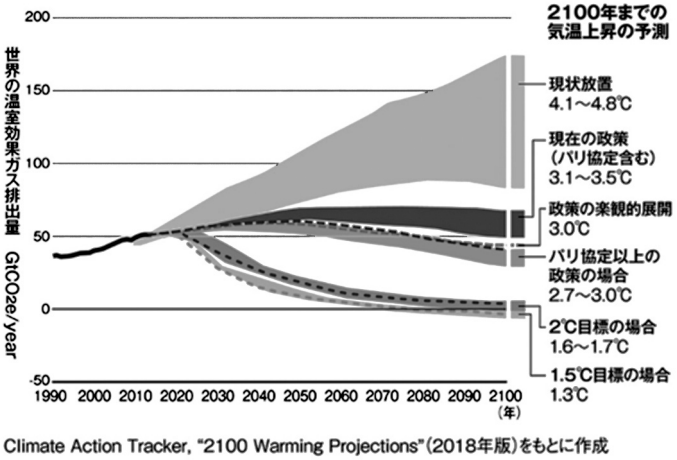
出典：斎藤幸平『「人新世」の資本論』（集英社新書、2020年）より

図5のグラフがより分かりやすいかもしれませんが、二酸化炭素の排出量を地域別に見ています。我々が生きているこの時代に、急速に二酸化炭素の排出量が増えているということです。地球の歴史の46億年の中でこの100年や50年さらには20年がいかに大きなインパクトを地球に与えているのかを考えると、私たちの責任はいかに重いかということが実感できると思います。

図6のグラフは地球温暖化がどのように進むのかということについて、講じられた対策ごとのシミュレーション結果です。2020年からスタートして、現状

を放置してしまうと気温がさらに2100年までには4.1度から4.8度も上がってしまいます。このようになると氷山が溶けて海面が上昇したり、災害や森林火災など、想像を絶するものになるのではないでしょうか。パリ協定を含む現在の政策を進めたとしてもかなり深刻な状況になると予想されており、2015年のパリ協定以上の政策を進めていく必要があるのではないでしょうか。科学者たちが提案するのはグラフの一番下にあたる1.5度目標ということですが、そのためには革新的な行動変容が不可欠になると思います。

図６　対応策別・地球温暖化の進行予測



出典：斎藤幸平『「人新世」の資本論』(集英社新書、2020年）より

私たちが日々、自然の中に暮らしていても、このような変化はなかなか気が付かないかもしれませんが、長いトレンドの中で見ると、明らかにこの50年、この20年というのが大きな変化をしている時期であり、それが私たちの行動によるものだということです。

私の専門とする分野が安全保障や紛争、平和の問題ということもあるので、もっぱら世界の紛争に対して、なぜ人々は意図的に、作為的に別の国の領土を侵略しようとするのか、なぜお互いに憎しみ合い、人々に攻撃をし、尊い命を失わせようとするのかということ、そして、意図的、作為的な紛争、戦争、攻撃をどのようになくすかということにかなりの時間を割いて考え、議論をして

きました。

しかしながら現在では、私たちが無意識のうちに、あるいはほとんど関心も持たずに不作為で行動している結果であったとしても、それが気候変動のような大きな危機を生み出しているということの重大さを痛感しています。

そのような危機の中にあるにもかかわらず、多くの国々が国際協調よりも自分の国のことだけを考えるという動きがあります。私はこれを「反多国間主義」と言っていますが、大国を中心として自己中心的な行動をとるために国家間対立が広まっていくことになります。

また、急速に科学技術が発展し、イノベーションが起こっていますけれども、これが人々を豊かに、幸せにするために使われるのであればいいのですが、そうではない方向に使われる結果、さまざまな問題が出てきています。このようなことが46億年の地球の歴史の中で、1945年以降、特に最近の数十年間の大きな変化になっています。やはり今は、この流れを変えていくことが必要なときです。その中で、SDGs が出てきたと思います。

SDGs は2015年9月に国連本部で開催された「国連持続可能な開発サミット」に150人を超す各国首脳が参加し、コンセンサスで決議が採択されました。これはたいへん重要なことで、なぜかと言うと、国連総会という全ての国連加盟国が集まる場で、大使級でも大臣級でもなく、首脳級、つまり国王や大統領、首相たちが、皆が忙しい中で150人以上も集まり、コンセンサス、つまり全会一致で採択された決議だからです。それだけでもこの SDGs が世界共通の国際目標だと言ってもおかしくない正当性があると思います。

国連大使としての日常の仕事はこうした決議文の文言をどのように調整し、採択に持ち込むか、妥協も含めて多様な意見をどのようにこの文章にまとめるかということなのですが、出来上がるときれいなパンフレットになって世界の皆さまに一緒に見てもらい、報道してもらうということになります。

パンフレットに記されたもともとのタイトルは「TRANSFORMING OUR WORLD」、「私たちの世界を変革」するということです。「持続可能な開発のための2030年アジェンダ」という名称は2030年をゴール年としてそこまでに持続可能性を高めていこうということです。そのキーワードが「変革」であり、

このままでは実現できないので今こそ変革をしなければいけないということなのです。

2015年9月に決議が採択された瞬間、国連総会議場のホールに集まった各国首脳が拍手喝采をおくりました。大きな成果がここで実現したという興奮状態、お祭り状態になった観がありました。直前まで各国の外交官が寝食を忘れて交渉していたという背景もありますし、この日はローマ教皇も来られてスピーチをされましたし、会場には最年少でノーベル平和賞を取ったマララさんも居合わせました。そうしたことから決議採択のセレモニーは大いに盛り上がったのだと思います。

過剰演出と思われるかもしれませんが、国連ビルの外側の壁面いっぱいにプロジェクションマッピングでロゴを映し出しました。2015年のこの日を境に2030年までにこのSDGsをどんどん達成していこうという世界の総意としての意欲の表れが、このようなところにも見えているという雰囲気を感じ取っていただきたいです。

このSDGsも実は急に出てきたわけではなく、さかのぼると1972年の国連人間環境会議があり、その後は環境関係、防災関係、社会開発関係もあれば、MDGsというゴールの作成もあります。それまでのゴールはどちらかと言うと、環境保全、社会開発、防災減災、ビジネス、教育という個別の分野だったと思います。それらを一つにまとめてパッケージ化し、これを全て行わないと地球はサステナブルにならないと打ち出したものがSDGsであったと考えると、1972年以降のこのような取り組みの集大成であることが見えてくると思います。

しかし、2015年にSDGsが採択されてから6年を経過し、私たちはどれだけ達成に近づくことができたのでしょうか。いまだにSDGsの認知度が十分ではないこともあるかもしれません。創価大学は別だと確信していますし、私もいろいろなところでSDGsの重要性を話していますが、もう少しで中間点を越し、2030年までラストスパートという時期に入ります。もちろん2030年で全てが解決するわけではなく、その先につなげるためにも、基本的な足場固めを2030年までにしなければいけないということだと思います。

そこで今度は、世界市民教育を通じてどのように世界の人々と一体になるのか、あるいは地球環境と共生していくのか、そして未来とどのように一つになっていくのかということをお話ししたいと思います。

地球との“Oneness”を進めていくためには、我々は地球に暮らすものであることを自覚し、自然環境と一緒に暮らしていく必要性を実感することが大事です。最近、国連はプロジェクションマッピングをよく使うのですが、2019年の国連気候サミットでは国連総会議場の壁自体を森に変えていました。

なぜこの写真を出したかというと、私は大使をしていたこともあり、国連本部という場所は外交官が集まって議論をしている場所であり、首脳が来て演説する場所であると思われがちですがそうではありません。私も国連大使として体験してきたことですけれども、今の国連は市民社会の代表の皆さま、社会活動家ではありますが高校生のグレタさんやビジネスのリーダーや宗教のリーダーなど様々な人が来て、世界を良くしたいということで議論をする場所です。

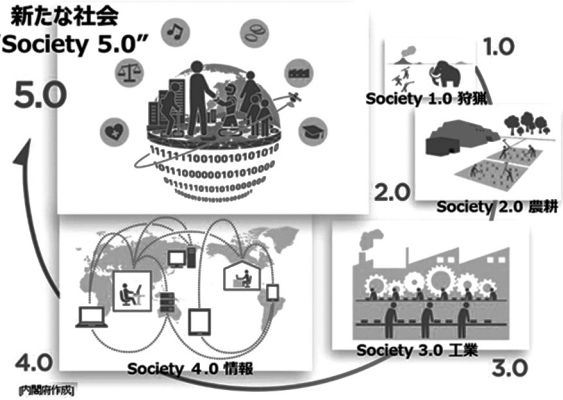
世界市民教育もそうですが、第一に考えるべきことは自分も責任のある１人で当事者であるということであると思います。政治家や外交官の誰かに任せて決めてもらうのではなく、物足りなければ自分が行き、その場でアピールするぐらいの思いがあってもいいと思いますし、国連ではそのような発言をする道もあります。

今日は若い方もたくさんお聞きになっていると思いますが、現在、グテーレス国連事務総長が強調していることの一つは、若い人たちの声を聞くことです。グレタさんとも直接対話をしています。グレタさん自身がおっしゃっているのは、大人たちが勝手に物事を決めないでほしい、実際に影響が出るのは私たちだから、私たちの声も聞いてほしいということです。ここで話を聞かれている学生も含めた若い皆さまが当事者として今から発信をすることはとても大切なことであり、発言をすることが自分の未来にも直結していることを理解してもらいたいと思います。そのように、国連を身近に感じてほしいと思います。

現在は急速に科学技術、イノベーションが変化している時期です。日本政府

もSociety 5.0を提唱し、これがSDGsにも大きく貢献するはずだと議論をしています。Society 5.0のイメージを見ていただくとSociety 1.0は狩猟をしていた時代で、それがSociety 2.0で農耕社会になり、Society 3.0で工業化が進んだ社会になり、Society 4.0では情報化が進んだ現在の社会ということになります。次の新しい社会は、サイバー空間とフィジカルな空間が高度に融合した世界になるだろうといわれています。つまりAIやIoT、ロボティクスなどいろいろなものが日常生活の中に自然と入ってきて、それが人々の医療分野やモビリティーの分野、インフラの分野など、いろいろなところに入り込んでいくわけです。

図7 新たな社会
“Society 5.0”



出典：内閣府

このSociety 5.0をうまく進めていくことができれば、経済発展と社会的な課題解決の両立になるということで、政府としてもその方向性を強調しているわけです。これもSDGsの実用のために、いろいろなところで貢献すると思います。テレメディシン（遠隔治療）もありますし、ロボットによる介護、エネルギー利用の多様化など、さまざまなものが自動化していきます。これらをいい方向に持っていくというのも未来との“Oneness”になると思います。

そして、現在、人類は新型コロナウイルス感染症と戦っています。菅総理が国連での演説で表明したように、この感染症の拡大は世界の人々の生命、生活、尊厳、すなわち人間の安全保障に対する脅威であるので、誰一人取り残さ

ないという考えの下に対応するのが極めて重要です。そして、日本は人間の安全保障の考え方の下でユニバーサル・ヘルス・カバレッジを達成し、誰の健康も取り残さないという目標のために国際協力を進めていくということも述べられています。

コロナ禍で私たちは厳しい状況に迫られていますが、私はこの新型コロナウイルス感染症は Wake-Up Call ＝目覚ましとなる警鐘であったのではないかと思うときがあります。今までの普通の生活が突然の災厄で全てが止まってしまいました。しかしながら、止まってしまったのであれば、次は新しい世界をつくるという変革のスタートの好機にできないかと考えています。

次なる新しいノーマルをつくりだすためにどのような変革が必要なのでしょうか。当たり前と思っていたことを見直し、正解のない問題に取り組むためには新しい教育が必要だと思います。今までの理系や文系という垣根を越えた発想も必要ですし、大学においては授業で知識やスキルを得るというだけではなく、プロジェクト活動といった課外活動などもミックスし、行動することが必要です。

創価大学の世界市民教育の中でも強調されている多様な考えの人々の中で合意を形成するという実践の中でよりよい制度を生み出すことができれば素晴らしいと思いますし、このプロセスの中で自然な形で女性の皆さまが活躍されることも期待されます。また、責任ある利用者の視点で科学技術、イノベーションが使われていくことができればいいと思います。

このようなことが進むと「誰一人取り残さない社会」ができると思います。「誰一人取り残さない社会」というのは、誰も孤立をせず、独りではないことが実感できる社会であり、また構造的な格差、分断がなくなる社会だと私は思いますが、そのような方向に転換していくことが重要だと思います。

国連を研究している私からすると、1945年にできた国連システムは様々な点で時代遅れになっていると感じることがあります。それでは新しい国連をつくるのかというとそれは難しいですが、新しい秩序をつくる必要はあると思います。しかし、国際社会秩序の変革は戦争によってもたらされてきたという歴史があります。国連ができたのも第二次世界大戦という戦争の結果であります

し、その前の国際連盟ができたのも第一次世界大戦の結果だったということを思い起こせばよく分かると思います。

しかし、私は次の世界秩序をつくるために大戦争は要らないと思います。なぜなら、この新型コロナウイルス感染症が世界戦争に匹敵するぐらいの大きな犠牲と負担を私たちに及ぼしているからです。国連が言語に絶する世界大戦の惨害から新しい世界をつくるといったように、言語に絶するコロナパンデミックの惨害の経験のうえに次の世界の秩序をつくるべきだと思います。

SDGs は新たな世界秩序の指標を提示するものであると思います。そして、日本が強調してきた人間の安全保障という考え方もその柱に据えられるべきだと思います。人間の安全保障を促進するという意味でも日本はしっかりとした役割を果たすべきだと思います。

新しいテクノロジーの活用、女性や次世代のエンパワーメント、アジアの活躍といったところも、新しい世界秩序の中に出てきてもいいと思います。このような新たな世界を生み出す動きの中でこそ世界市民教育は大きな柱になるものと確信します。

以上、駆け足で世界市民教育と SDGs について私なりに考えたことを話させていただきました。世界の中で三つの“Oneness”、「世界の人々と私は一つである」、「地球生態系と私は一つである」、「未来の時代と私は一つである」ということを考えつつ、私も含めた皆さま一人一人が、人間と地球と未来とつながる学習をすすめていけば、確かに世界を変えていくことができるということを申し上げて私の結論とさせていただきます。

※本稿は2021年6月5日に行われた創価大学シリアルイベント〈価値創造×SDGs〉「創価教育と世界市民教育」における基調講演の抄録である。